
ソリッドステート・Strikers

losepact

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソリッドステート・Strikers

【Nコード】

N2352N

【作者名】

l o s e p a c t

【あらすじ】

JS事件から数ヶ月後、機動六課は平和な時を過ごしていた。

同じ頃、別世界ではサイヤ人の下級戦士・バーダックが、たった一人でフリーザに立ち向かっていた。

この小説では、バーダックのキャラが若干崩壊している恐れがあ

ります。

ので、『バーダックのイメージを壊したくない方』や『コラボ小説嫌いな方』はご遠慮ください。

追記、なのは達は戦闘面ではあまり活躍しませんm(_ _)m

変わる運命

フリーザ軍の雑兵を蹴散らしながら、宇宙船に向かっていくサイヤ人の下級戦士がいた。

彼の名はバーダック。

そう、フリーザ軍がサイヤ人を裏切ったことを知り、たった一人で立ち向かっていったのだ。

「フリーザあ！！出てきやがれえー！！俺は貴様が許せねえ！！」

雑兵に取り押さえられながらも、バーダックは宇宙船前までたどり着いた。

そしてサイヤ人を裏切った張本人、フリーザが姿を現す。

その姿を見て雑兵達は怯え、バーダックはニヤリと笑う。

「これで…全てが変わる。この惑星ベジータの運命…」

フリーザは黙ってバーダックの話を聞いている。

「この俺の運命…カカロットの運命…そして貴様の運命も！」

バーダックは右手にエネルギーを溜めている。

そして腕を振り上げ、エネルギー弾をフリーザ目掛けて放った。

「これで最後だぁー！ーッ！ー！」

バーダックの渾身の一撃がフリーザに迫るが、フリーザは余裕の表情を浮かべていた。

「ホッホッホ…」

フリーザは指先から巨大なエネルギー弾を作り出し、バーダックの攻撃を吸収した。

「な、なにッ！？」

「ホッホッホ！オーッホッホッホ！ー！」

フリーザは高笑いをあげながら、巨大エネルギー弾をバーダックに放った。

多くの部下達を巻き添えにしながら…

「フ…フリーザ様ああ！？」

「うわああ！？」

くバーダック視点く

フリーザの放った攻撃が俺に迫る。

普段なら回避出来る速度だが、今の俺は先程のドドリアの攻撃で重傷を負っている。

「うわああああああああああ！！」

俺はあっという間に奴の攻撃に飲み込まれた。

だが何故だろうか…奴に敗北したのにもかかわらず、俺の心は不思議な充実感で満たされていた。

俺は知らず知らずのうちに、ニヤリと笑っていた。

「フ…フハハ…！！」

だんだん意識が薄れてくる。

「カカロットよおおおお！！！！」

トーマ…セリパ…すまねえ…

ここで俺の意識は完全に吹っ飛んだ。

*

……あれ……？

…俺は……生きているのか……？

それよりも……ここは何処だ？

俺が横たわっている場所は鉄製なのか、冷たい。

それに……潮の匂いがする。

そんなことを考えていると、誰かが俺に近づいてきた。

「こ……この人怪我してる！」

「ティア！早くシャル先生呼んできて！」

青いショートカットの女が、橙色のツインテールの女に叫ぶ。

俺のために…助けを呼んできてくれるのか……？

そう考えると妙に嬉しくなった。

トーマ達以外に…俺に優しくしてくれる奴がいたなんてな…

…ダメだ…また意識がもうろうとしてきやがった…

さっきのツインテールが戻ってきたと同時に、再び俺の意識は薄れていった。

*

次に目が覚めた俺が見たのは、さっきの二人と金髪の女だった。

「あ！目が覚めましたよ！

ショートカットが俺の顔を覗き込み、嬉しそうに笑う。

さっきと比べて随分身体が楽になった。

「私の回復魔法です。効きましたか？

金髪が話し掛けてきた。

「す…すまねえ…」

俺は情けない声で礼を言う。

回復魔法…そんなものがあるのか、治療カプセルより便利じゃねえか。

「ねえティア、あの人ちょっと目が怖いね」

「しっ！聴こえるわよ！」

遠くで二人がコソコソ話してる。

聴こえてるって…

事情聴取（前書き）

感想やアドバイス、意見など待っています！

事情聴取

バーダックが機動六課に保護された翌日、彼の病室にフェイトがやってきた。

「早速で申し訳ないんですが、あなたの事を色々聞かせてください」

（また女か…サイヤ人と違ってこの星は女が多いなあ……）

そんなことを考えていた。

「あの…よろしいですか？」

「え？ああ、いいぞ」

*

数十分後、事情聴取を終えたフェイトは病室から出てきた。

「フェイトちゃん。どうだった？」

そうフェイトに尋ねる茶髪の女性、高町なのは。

「うん…それが、よくわからないの。もしかしたら次元漂流者かもしれない」

フエイトはバーダックから、ここミッドチルダに来るまでの事を聞かされたが、理解出来ないでいた。

「それで、あの人はなんていう人なの？」

「バーダックって言ってた。それと、自分は戦闘民族サイヤ人とも……」

「戦闘民族……？」

なのはは首を傾げる。

「とりあえず検査の結果、リンカーコアはないみたい。でも自分は戦えるって……」

「そっかぁ……とりあえずはやってちゃんとも相談しようか」

二人ははやての部屋へと向かった。

*

「面白そうやな。私もその人の腕見たいわ！」

「はいですー！」

二人の報告を聞いたはやてとリインが頷く。

「じゃあ、模擬戦用のガジェット用意しようか」

「そうだね」

はやての許可を得た二人は、模擬戦場へ急いだ。

*

コン！コン！

バーダックの病室にノック音が響く。

「なんだ？」

ガチャ！

「失礼します！」

突如二人の少女が入ってきた。

「…お…お前達、確か……」

「はい！スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです！」

スバルとティアナは敬礼した。

「スバルにティアナ…か。俺はバーダックだ。よろしくな」

バーダックは、スバルとティアナの二人と握手を交わす。

「で、俺に何か用か？」

「はい。実は、なのはさ…いえ隊長の命令です。我々と一緒に同行ください！」

「同行だと？いったい何をする気なんだ？」

「部隊長達は、バーダックさんの腕が見たいと言っています。ぜひ見せてください」

ここでバーダックは、自分はまだ戦えることを悟った。

サイヤ人としての本能が、戦いを望んでいるのだろうか…。

「わかった。ちょっと待て」

そう言ったバーダックはベッドから出て、赤く染まった布を頭に巻き、ヒビの入ったスカウターを装着した。

模擬戦

スバルとティアナに連れられ、バーダックは模擬戦場にやってきた。

「ここ…俺が倒れてた場所じゃねえか！」

「はい！」

突如後ろから声が聞こえ、振り向く三人。

「なのはさん！あ、バーダックさん！この人がさっき言った、高町なのは隊長です！」

スバルがバーダックに、なのはを紹介する。

「はじめまして、高町なのはです。さっそくで申し訳ないんですが…」

「俺の腕を見たいんだろ？いいぜ、やってやる！腕が鳴るぜ！」

そう言ったバーダックは額の布をギュツと締め直した。

近くのビルの屋上から、はやてやヴォルケンリッター達、ライトニング達も、

バーダックのことを見ていた。

「なんかあいつ目つき悪いな」

バーダックの第一印象を言うヴィータ。

「そうかな？でもヴィータ達みたいに優しい人かもしれんよ」

はやてとシャルは笑っている。

「事情聴取の時は普通に話せたし、多分いい人だよ」

フェイトはバーダックと会うのは二度目である。

「あの人…物凄く強そうだね、キャロ」

「うん…」

エリオとキャロは、サイヤ人の潜在能力に気づいたのかもしれない。

*

バーダックの前には、小型ガジェットが20機もいる。

「こいつらの戦闘力は全部700か…他愛もねえな」

そう呟きながら、小型ガジェットの戦闘力をスカウターで測定するバーダック。

「ティア、あの機械なんだろう？」

「さあ…相手の強さでもわかるんじゃない？」

当てずっぽうだが、実は正解だ。

しかもスカウターは戦闘力の測定だけでなく、通信もできる。

「バーダックさん、よろしいですかー!？」

遠くからなのはが問い掛ける。

「ああ、いつでも来い！」

バーダックがそう言ったと同時に、ガジェット達が動き出した。

シュン！

一瞬にしてバーダックの姿が消える。

「消えた!？」

「ティア！あそこ！」

スバルが指さした先では、バーダックの拳がガジェットを貫いていた。

「だりゃあ!！」

バーダックはガジェットから腕を抜き、他のガジェットにぶつける。

ドガアアアン！！

「おらああー！！」

更にバーダックは、五機で集まっているガジェット達にエネルギー弾を撃ち込んだ。

ドガアアアン！！

*

「ほう…なかなかの腕だな」

「確かにすげえな…」

ヴォルケンリッター達は、驚きのあまり絶句していた。

「す…凄い…！」

「格好いい！」

エリオとキャロの二人は、半ば興奮しながらバーダックの戦いを見ていた。

「確かに奴は凄い。私も一度手合わせ願いたいな」

ザフィーラも感心していた。

*

「どりゃああ!!」

バキッ!!

続いてバーダックは、蹴り一発でガジェットを三機も撃墜した。

残りのガジェットは10機にも減っていた。

だがガジェット達は一機一機の動きが違うので、バーダックを翻弄する。

「でえい!!」

ドシュン!

最後に、必殺技のライオットジャベリンを地面に放った。

鉄製の地面に直撃したライオットジャベリンは爆発し、周りにエネルギーが飛び散る。

そのエネルギーは一機一機のガジェット達に当たり、武装部分が溶けてしまった。

「これでもくらいやがれえ!!」

そう叫んだバーダックは、猛スピードで各ガジェットの後ろに回り

込み、彼らの心臓ともいえるエンジン部を蹴飛ばし、粉碎した。

「はぁ…はぁ…久々に熱くなっちまった」

ガジェットをすべて撃墜したバーダックは着地する。

息切れしているが、彼の顔は楽しそうに笑っていた。

「戦闘時間は…一分半!？」

「凄い!凄いですバーダックさん!」

スバルは自分の事のように喜んでいる。

(まさかなのはさん以上の使い手がいるなんて……私も頑張らないと!)

興奮するスバルとは対照的に、決意を固めたティアナだった。

「ふーっ、いい運動になったぜ…ん？」

こちらへ歩いてくるなのはに気づいたバーダック。

「凄いですねバーダックさん!あの…もしよろしければ、私達機動六課に力を貸していただけないでしょうか？」

(スカウトか…でも俺はフリーザを…!)

事情聴取の際、機動六課並びに時空管理局についてはフェイトから聞かされていた。

「悪いが俺はフリーザを倒さなきゃなんねえんだ。だから時空管理局に協力は出来ないぜ」

「その話なんですが…ここは、あなたの居た世界とは違うんです。それに、解決法も無いので今は帰れません」

静かになのはが言う。

「な…なんだって!？」

ようやく自分に起きた事態を悟ったバーダックは、なのはの肩をギョツと掴む。

「ふざけんな!これじゃ…トーマ達にあわせる顔がねえ…!」

「お…落ち着いてください!」

二人の間に割って入ったのはスバルだ。

「何か事情があるんですか?私達に話してください!力になれるかもしれません!」

「ちょっとスバル!バーダックさんにだって言えない事はあるわよ!」

更にティアナまでやってきて、端から見れば喧嘩しているような状態になってしまった。

「…仕方ねえな。話してやるから静かにしろ!」

スバルに根負けしたのか、バーダックはミッドチルダに来る以前の自分の経緯を語った。

*

「宇宙一凶暴な戦闘民族サイヤ人…それがバーダックさんかあ…」

「へっ、あたしは信用できねえな！」

いつの間にか、ビルにいた者達が模擬戦場に降りてきている。

どうやら彼女達もバーダックの話を聞いていたようだ。

「だいたい、その…なんとか人だってんなら証拠見せてみるよ！」

キツイ口調で責めるヴィータ。

「これが証拠だ！」

そう言ったバーダックを見た、全員が驚いた。

「…し…尻尾…!?!」

普段腰に巻きつけている尻尾を、くねくねと動かすバーダック。

「う…」

決定的な証拠を見せつけられ、驚くヴィータ。

「さ…猿みてえだな…」

ヴィータがそう呟いた時、バーダックの目つきが鋭くなった。

「…ッ！」

ガシッ！

気づいた時には、バーダックはヴィータの胸倉を掴んでいた。

しかも奥歯を噛み締め、胸倉を掴んでいない方の拳を握り締めていた。

「二度とその口をぬかすな…次言ったら命は無いと思え…！」

いきなり激怒したバーダックに驚き、全員が黙り込む。

「…チッ！」

バーダックは舌打ちし、ヴィータから手を離すとその場を立ち去っていった。

*

「ヴィータ、あれはあかんで…」

バーダックを猿呼ばわりしたヴィータは、はやてと他の守護騎士達からお叱りを受けていた。

「でもバーダックさん…なんであんなに怒ったのかしら…？」

「さあ…」

「尻尾がコンプレックスだったんですかね…？」

皆が首をひねり、バーダックが激怒した理由を模索している中、スバルは何かを悟ったような表情を浮かべていた。

スバルとバーダック

夕方、バーダックは施設の屋上にて寝転がって夕日を眺めていた。

「こんな所で何してるんですか？」

突如、少女の声がバーダックの耳に届いた。

その声に反応し、バーダックは起き上がって振り向く。

「……スバルか」

「はい！」

スバルはバーダックの隣に座る。

「…さつきはどうして…あんなに…？」

「…ッ！」

再びバーダックの表情が険しくなる。

「あ！す、すみません…」

「気にすんな」

それだけ言い、夕日に視線を戻すバーダック。

「…私も…他の人と違うから……」

「…ん？」

スバルの台詞に反応したバーダックは、彼女の方を向く。

「私も…他の人とは違うんです」

「は？……何言ってるんだ？」

バーダックが首を傾げる。

「実は私…“作り出された”人間なんです」

「なにッ…！？」

唐突に告げられ、驚きを隠せないバーダック。

「作り出された人間って…なんだそれ！？」

理解できない様子のバーダックに、スバルは自分やギンガの生誕の理由を話した。

*

「そうか……」

（戦闘のためだけに生み出されるなんて…まるでサイヤ人じゃねえ

か…)

「まあ慣れちゃいましたけど、えへへ…！」

若干頬を赤らめたスバルが苦笑する。

「そつだ！話戻しますけど、なんでさっきはあんなに…」

「ああ、それはな…」

今度はバーダックが、自分達サイヤ人の人生を語った。

*

「…つまり、その悪い奴に働かされ続けた上で殺されちゃうってことですか…？猿呼ばわりされて…」

「おうよ。俺の仲間も随分殺されちゃった……もう俺の故郷、惑星ベジータは影も形もないだろうな」

ため息をつくバーダック。

「いつバーダックさんの世界に帰る方法が見つかるかわかりませんが、その時は頑張ってくださいね！」

スバルは満面の笑顔をバーダックに向ける。

「…へっ…おう！」

そんなスバルを見て、バーダックも自然に微笑んでいた。

「そろそろ戻りま……あつ……」

ふいに後ろを向いたスバルが、何かに気付いたようだ。

「あ……バーダックさん……」

突如名を呼ばれ、バーダックは振り向いた。

「お……お前ら……」

「ヴィータ副隊長に八神部隊長！」

そう、はやてとヴィータだった。

「えーと……バーダックさん。さっきは、本当にすみませんでした。ヴィータ、ごめんなさいは？」

はやてがヴィータを諭す。

「……ごめんなさい。あんなこと言って……」

「もう気にしてねえよ。俺の方こそ悪かったな」

スバルやはやての仲介もあり、バーダックとヴィータは和解した。

「今日はバーダックさんの歓迎会やるから、早よ来てくださいね」

（いつの間にか所属することになってやがる……）

呆れるバーダックだが、彼の顔は妙に嬉しそうだった。

（トーマ達を守れなかった分、こいつらを守ってやるか……）

そう、新たな仲間を…

休息

「あ、戻ってきた」

はやて達に連れられ、バーダックが食堂にやってきた。

「今日はバーダックさんの歓迎会やねんから、遠慮せんでええよ」

「いやそうじゃなくて…この量は……」

そう、バーダックが気になっているのは食事の量だ。

全テーブルに乗っている料理の全てが山盛りなのだ。

「あはは…多すぎちゃったかな？」

なのはが苦笑する。

「いや、むしろ少なえ」

「え!!!?」

「は!!!?」

バーダックの発言に、全員が驚愕する。

驚くのも無理はない。

サイヤ人は、地球人より食べる量が何倍も多いのだ。

「お前らこそ、これで足りるのか？」

（本当に凄い人だ…）

スバルは一瞬、バーダックに恐怖感を抱いた。

「と…とりあえず食べよか！皆お腹空いてるやろっし…」

結局はやてが音頭をとり、バーダックの歓迎会が始まった。

*

「おい、これ十人前追加頼む！」

「は、はい！」

十分後、調理師は大急ぎで仕事に励んでいた。

「……………」

なのはを始め、大半の者はバーダックの食いつぶりに啞然としていた。

「凄いです…」

「やな…」

「おいバーダック！あたしの取るな！」

「うるせえ！これは俺んだ！」

ただ一人、ヴィータだけはバーダックと飯の取り合いをしていた。

ちなみになのは達は、エリオとキャロがこっそり確保していた料理を食べていた。

「なのはママー、プリンとってー！」

「はい、ヴィヴィオ！」

なのはからプリンを渡されたヴィヴィオが笑顔を見せる。

そんな光景を見たバーダックの動きが止まった。

「おいヴィータ、あのガキは？」

「あの子はヴィヴィオ。私となのはの義理の娘です」

ヴィータの代わりにフェイトが、バーダックに説明する。

「義理…？まあ詳しい事は聞かねえが、その歳で大したもんだな」

「そんなことないですよ。バーダックさん、お子さんは?」

フェイトの問いに対し、バーダックは少し目を背けた。

「ああ、二人いる。二人とも、今何処に居るかはわからねえ…」

バーダックは、あえてカカロットが地球に送られたことは言わなかった。

(…話がややこしくなっちまうからな)

「フェイトママー!」

バーダックとフェイトが話し込んでいると、ヴィヴィオがフェイトに駆け寄ってきた。

「あ、ヴィヴィオ」

フェイトは駆け寄ってきたヴィヴィオの頭を撫でる。

「ヴィヴィオ、こちらはバーダックさん。ご挨拶は?」

ヴィヴィオはバーダックの顔をじーつと見ている。

「…な…なんだ?」

「こんばんは!」

ヴィヴィオは元気良く、バーダックに挨拶した。

「お、おう…」

少し戸惑いつつも、バーダックはヴィヴィオの頭を撫でた。

するとヴィヴィオは嬉しそうに微笑み、こう言った。

「おじさんってパパみたいだね！」

「「！！？」」

再び全員が静まり返った。

「ふえっ！？」

「ええっ！？」

特にママと呼ばれているのはとフェイトは頬を赤らめ、動揺する。

「ヴィ、ヴィヴィオ！何言ってるの！？」

「ど…どどうしてバーダックさんがパパなの！？」

対するヴィヴィオはにっこり笑っている。

「よくわかんない。でもおじさん、やさしそうだから！」

くバーダック視点く

優しそう、か…

ラディッツやカカロットにも…父親らしいことはしてやれなかったからな…

特にラディッツに厳しく接した時、セリパに「少しは優しくしてやんな」ってよく言われたっけ…

罪滅ぼしってわけじゃねえが…目の前のガキの為に、父親の代わりにやるのも悪くねえかもな…

そう考えながら、俺はヴィヴィオを肩車していた。

「ふふっ！バーダックさん、美人の奥さんが二人もできてしもうたな！」

はやてが俺の顔を見てニヤニヤしている。

「冗談言つな」

少し笑いながら、その一言を返す。

「バーダックさん！」

また声をかけられた。

聞いたことない…知らねえ声だな。

俺がヴィヴィオを肩車したまま振り向くと、そこには眼鏡をかけた女がいた。

…誰だこいつ？

すると俺の考えていることが読めたのか、その眼鏡が口を開いた。

「あ、申し遅れました。私、シャリオ・フィニーノといって、皆さんのデバイスの整備を担当しています」

「おう。えつと…シャリ……」

チツ、難しい名前してやがるぜ。

「皆さんからは“シャーリー”と呼ばれてますんで、よかったらそう呼んでください」

その眼鏡…じゃなかった、シャーリーが俺に微笑む。

「ところでバードックさん。その機械は…」

機械…？ああ、スカウターのことか。

俺はスカウターを外した。

「こいつがどうかしたのか？」

「その機械、デバイスに改造できますよ！どうしますか？」

さっきも言ってたデバイスが少し気になるな。

「ところでデバイスって何だ？」

俺はシャーリーにそう尋ねる。

「デバイスっていうのは、簡単に言うとパートナーです。例えば、なのはさんのレイジングハートさんがそうです」

よく見ると、なのはが首にかけている赤いビー玉みたいなもんが見えた。

「普段は小さくなってるんですが、戦闘時には強力な武器に変身しますよ！」

元々スカウターに武装はついてないが…ひび割れてるし、頼んでみるか。

「じゃあ頼むぜ」

そう言った俺はシャーリーにスカウターを手渡した。

「ねえおじさん。プリンとってー！」

俺が肩車しているヴィヴィオが話し掛けてきた。

「おう、ちょっと待ってる！…頼んだぞシャーリー！」

プリンは…あった。これか？

「これゼリーだよ…」

間違えちゃった…。

俺の相棒（前書き）

バーダック視点です。

俺の相棒

俺の歓迎会は色々ありつつも無事に終了した。

はやてから部屋を与えられた俺は、早速ベッドに寝転がっていた。

…優しくされるのも案外悪くねえな…。

意外にも俺は、この機動六課を気に入ったようだ。

フリーザの下で働いてた時は…こんな事考えたこともなかったな。

自分達サイヤ人…特に最下級戦士が人に優しくされるとはな…

考え事していると、瞼が重くなってきた。

今日はもう寝るか…

*

翌朝、部屋のドアをノックする音で俺の目が覚めた。

まったく、誰だ？

「おはようございます！スバルです！」

スバルか…あいつは朝から元気だな。

とりあえず俺はベッドから飛び起き、ドアを開けた。

「おはようございますバードックさん！」

「おう。それより何か用か？」

「実は…バードックさんのデバイスが完成したんです！なので、今からシャーリーさんの所へ一緒に行きましょう！」

…そうか、昨日俺はシャーリーにスカウターを渡したんだっただな。

もう完成したのか……早いな。

フリーザ軍では、宇宙ポッドを一つ修理するのにも一日はかかったぞ。

もしかして…このミッドチルダって文明が進んでいるのか？

「…そうだな。行くか」

「はい！」

スバルは満面の笑みを浮かべ、俺の方を向く。

そして俺達はシャーリーの所へと向かった。

＊

移動すること数分、俺とスバルは研究室のような場所に到着した。

「あ、バーダックさん！」

声のした方を向くと、シャーリーが俺に手を振っていた。

「デバイスとかいうのが完成したって聞いてよ」

俺はすぐさま、シャーリーの方へ歩いていく。

「これです。どうぞ！」

シャーリーが俺に渡してきたのは、なんと新品同様のスカウターだった。

これじゃ…スカウターのレンズ部分を修理しただけじゃねえのか？

俺の考えていることが読めたのか、シャーリーが口を開いた。

「ああ、バーダックさんは魔力が使えないと伺っていましたが、収縮化は出来ませんでした。でも、機械に自我と強度は追加出来ました！」

自我…？それはすげえな！

しかも強度も増したんなら…宇宙最強のスカウターだぜ！

「シャーリーさん！そのバードックさんのデバイス、名前とかあるんですか？」

スバルがシャーリーに尋ねる。

「名前…だと？」

俺はスバルに問う。

スカウターに名前なんかつけてもしょうがねえじゃねえか？

「私のデバイスは、マツハキヤリバー。ティアのはクロスミラージユっていうんです！」

「……」

俺はシャーリーから受け取ったスカウターをじっと見つめ、スバルの説明を聞いていた。

そういえば…デバイスはパートナーだってシャーリーが言ってたな。

いつか元の世界に帰った時…こいつと共にフリーザ達と戦うんだな…

「そうか…だがスカウターのままでいい。その方が呼び慣れてるしな」

「そうですか…それもいいですね！」

スバルとシャーリーが俺に笑顔を向ける。

「さ、スカウター。この人があなたのパートナーですよ！」

シャーリーがスカウターにそう呼びかける。

《……………よろしく……………》

スカウターからそう聞こえ、レンズ部分が光った。

…まったく、トテッポみたいに無口というか…無愛想な奴だな。

日常

バーダックがやってきて数ヶ月…なのは、フェイト、はやての三人はカリムとクロノに呼び出され、本部に出向いていた。

「さて、今日来てもらったのは…大事な報告があるからだ」

「報告…なんやろ…？」

はやてを始め、なのはとフェイトも首を傾げている。

「実は…最近、局員が何者かに殺害される事件が立て続けに起きています」

「！？」

「と…通り魔！？」

うろたえるのはとフェイト。

「それはわからない。が、現在調査中だ。君達も十分注意するんだ」

*

その頃、六課本部では…

シュン！

「バーダック、交代だ」

ドアが開き、ザフィーラが入ってくる。

「おつ、もうそんな時間か。じゃ頼むぞザフィーラ」

ちなみにこの二人は、ヴィヴィオの子守りを担当していた。

「おじさん、おしごと？」

ヴィヴィオがバーダックに問う。

「ああ。ザフィーラの言うことちゃんと聞くんだぞ」

そう言い、ヴィヴィオの頭を撫でたバーダックは部屋を後にした。

*

「模擬戦したせいで汗かいちまったぜ」

彼はウィータとシグナムを同時に相手していた。

その後、なのはにヴィヴィオの子守りを頼まれたのだ。

「さつさとシャワー浴びるか……ん？」

シャワールームの前まで来たバーダックは、何かに気づき足を止める。

「…エリオか？」

シャワールームの前には、汗だくのエリオが立っていた。

「おいエリオ、何してんだ？」

「あ、バーダックさん！」

エリオもバーダックに気づく。

「お前汗だくじゃねえか。シャワー浴びないのか？」

「実は…今キャラ達が使ってたして、僕は待っているところなんです。バーダックさんも？」

「ああ、シグナムとヴィータとの模擬戦後にヴィヴィオの子守りだ。流石にサイヤ人の俺でも疲れるぜ…」

ため息をつくバーダック。

「大変ですね、バーダックさんも…」

シュン！

その時シャワールームのドアが開き、三人が出てきた。

「ごめんねエリオ君！遅くなって…」

さっそくキャロがエリオに駆け寄る。

「べ、別にいいよ」

「あ、バーダックさんだ！」

バーダックの姿を見つけたスバルが笑顔を見せたと同時に、ティアナがバーダックの前に出た。

「…バーダックさん」

「なんだ？」

いつもと違い、ティアナの様子が変だ。

「後で模擬戦場に来てもらっていいですか？相談したいことがあります」

「…相談…？…よくわかんねえが、かまわないぞ。ただし、俺がシャワー浴びてからだ」

「ありがとうございます…！」

バーダックに頭を下げるティアナ。

「んじゃまたな。エリオ、行くぞ」

「え…あ、はい！」

バーダックはエリオを連れ、シャワールームに入っていった。

*

「…そうか…お前はフェイトの養子なのか」

「まあ、そんなところです。ちなみにキャロも…」

「お前達苦労してるんだな…」

二人はシャワーを浴びながら、話をしていた。

「ずっと考えてたんですけど…どうやったら、バーダックさんみたいに強くなれるんですか？」

その質問の回答に困ったバーダックは、俯いて考え込む。

「そうだなあ……エリオ、お前はフェイトやキャロが大事だろ？」

「はい！もちろん！」

力強く頷くエリオ。

「例えばその二人を“何が何でも守る”って考えて、必死で鍛えた

「強くなれるかもな」

「なるほど…」

数分後、汗を洗い落とした二人はシャワールームを後にした。

*

そしてバーダックはティアナに呼び出されたため、模擬戦場へと足を運んでいた。

「…あ、バーダックさん。わざわざすみません」

「どうしたんだ？こんなところに呼び出して…」

バーダックとしては、呼び出される理由が見当たらない。

「私…バーダックさんのように強くなりたいんです。どうやったらなれますか？」

（またこの相談か…）

実は新人達はバーダックの強さに、特にエリオは漢らしさにも憧れているのだ。

（ティアナ・ランスター…こいつは確か、過去に兄貴を失ったんだっただな…）

以前スバルからティアナの過去を聞かされたバーダックは、その事を思い出していた。

「ティアナ…俺は、お前達が思ってるほど強くはない。俺達サイヤ人は死にかけの状態から復活するたびに戦闘力が増す特徴があるんだ。正直、俺は何度も死にそうになったから…こんなに戦闘力が上がったんだ」

「でも…現にバーダックさんは強いじゃないですか！それに…私はもう兄のような人を出したくないんです！」

バーダックは深呼吸し、ティアナの方を向く。

「いいかティアナ。俺はお前を強くすることはできないが、アドバイスくらいはしてやれる」

そう言うときバーダックはティアナの目をじっと見つめ、言った。

「あんま無理すんな。お前が体調崩したら、スバルやなのは達が心配するからな」

「バーダック…さん…」

「それに…俺ももしかしたら、お前の兄貴と同じ末路を辿ったのかもしれないからね」

そう、ティアナの兄は犯罪者と交戦中に死亡した。

だがバーダックは彼と違い、運良く生き延びた。

おそらく元の世界では、バーダックは死んだことになっているだろう。

「何にせよだ。あんまり自分を責めるなよ。少しずつ…少しずつでいいから強くなれ」

そう言ったバーダックは、ティアナの頭を撫でる。

「あ…」

その時、ティアナの頬が紅潮した。

「俺が…俺がお前達を守ってやる。だから…安心して強くなれ」

そう言い、バーダックはティアナに背を向ける。

「…どこに行くんですか？」

「もうすぐ飯だろ？早く行こうぜ」

それを聞いたティアナは、ハッと我にかえる。

辺りはすっかり日が落ち、夜空に星が並んで光り輝いていた。

「そう…ですね。行きましょう！」

そうしてバーダックとティアナは本部へ戻っていった。

やってきた悪魔達

翌日、

「ティア起きて！朝練始まるよ！」

「……うん…バードック…さん…」

スバルが寝ているティアナを揺さぶり、起こしている。

「あ！バードックさんだ！」

「……え！？」

途端にティアナの目が開き、ベッドから飛び起きた。

「か、髪！」

慌てて髪をとかし、結ぶティアナ。

「おはようティア！」

「スバル！…ってバードックさんは！？」

ティアナはバードックの姿が見当たらないことに気づき、スバルに尋ねる。

「ごめん、ティア…」

スバルはそんなティアナに申し訳なさそうに謝った。

「ス〜バ〜ル〜！」

その時スバルは見た。

ティアナの周りを、灼熱の炎がユラユラとうごめいているのを…。

*

食堂にて、ティアナはまだ怒っていた。

「ど…どうしたんですか二人とも！」

事情を知らないエリオとキャロが困惑しているが、ティアナには関係ない。

「知らないわよ。スバルに聞けば？」

ティアナはぷいっと顔を背ける。

「ねえティア…もしかしてさ、バーダックさんの事好きなの？」

「ブッ…！」

スバルの問いに動揺し、ティアナは口に含んでいたコーヒーを吹き出した。

「やっぱり！」

「そ、そうだったんですか!？」

「理由はなんですか!？」

三人が一斉にティアナに食いつく。

「そ…その……」

ティアナは頬を赤く染め、向こうのテーブルの様子をチラッと窺う。

そこでは、バーダックとヴァイスが雑談している光景が見えた。

「俺は飛べるからそんなもんいらねえよ」

「バーダックの旦那にも自分のへりに乗ってほしかったんですがね。ま、気が向いたら乗ってやってください！」

「……乱暴だけど、本当はとても優しいところ…かな」

バーダックを見ていたティアナが口を開いた。

「ふん…!」

スバルはニヤニヤしながらそんなティアナを見ていた。

「な、なによ？」

「別にいゝ」

そうやって、平和な時間は過ぎていった。

*

午後、バーダックはなのは達に連れられ、聖王教会に来ていた。

「はじめましてバーダックさん。私はカリム・グラシアといいます」

「クロノ・ハラオウンだ。よろしく」

「おう！」

この日バーダックは、は yet からカリムとクロノを紹介された。

「さっそくなんだが、君達に見てもらいたい物がある」

クロノがそう言うと同時に、部屋の照明が消え、モニターに映像が映し出された。

「なッ…！？」

その映像を見たバーダックは驚愕する。

「…トリア…！？」

くバーダック視点く

その映像に映っていた奴は……

かつて惑星ミートでトーマ達を殺した、フリーザの側近の一人…トリアとフリーザ軍の雑兵達だ。

しかも奴らの周りには武装局員達が倒れている。

何故…何故あいつらがこのミッドチルダに…！？

「どうやら彼らを知っているようだな。詳しい事情を聞かせてほしい」

クロノが俺に言う。

カリムや皆が、俺の目をじっと見つめている。

俺は二人に事情を説明した。

*

「…そうか…君の世界で、君の仲間達を殺した奴の一味というわけか…」

「ああクロノ。だが、なんだってあいつらがこんな所に…！」

「おそらく、次元の波が発生したのでしょう。とりあえず、彼らが局員連続殺傷事件の犯人と見て間違いはありませんね」

カリムがそこまで言った時、スカウターから呼び出し音が鳴った。

レンズには、エリオと出ている。

「俺だ。どうした？」

《大変ですバードックさん！今すぐ六課に……ぐあッ！！》

エリオの短い悲鳴を最後に、通信は途絶えてしまった。

嫌な予感がする…

六課で何かが起きている！

「すまねえ！俺は先に六課に戻るぜ！」

それだけ言い、俺は本部を飛び出した。

*

飛ぶこと数十分、帰還した俺を待っていたのは…

「……これは…！」

なんと、六課の建物が少し崩壊している！

「…バ…バ…ダックさん…？」

俺の耳に弱々しい声が届く。

声のした方には…

「キャラロー!!」

全身ボロボロのキャラロが倒れていた。

その周りにはエリオやギンガ、スバルにティアナも倒れている。

他にも沢山の武装局員が倒れていた。

この光景を目の当たりにした俺が、かつて惑星ミートで仲間達を殺された時のことを思い出すのにそう時間はかからなかった。

「おい!!」

俺はすぐさまキャラロに駆け寄り、彼女を抱える。

「どうしたんだ一体!? 何があった!?!」

するとキャラロは向こうを指さし、意識を失った。

「…キャラロー!!」

何事が確かめるため、俺はキャラロの指さした方を向いた。

「!!!?」

俺の視線の先には、フリーザ軍の雑兵とドドリアがいる。

すぐさま俺は悟った。

六課を襲撃し、スバル達を襲ったのはこいつらだ！

「…てめえら…！」

俺は奴らを、特にドドリアを睨みつける。

「あの時のサイヤ人じゃねえか。てつきり惑星ベジータと一緒に死
んじまったのかと思ったぜ！」

ドドリアがニヤリと笑う。

あの時の俺は…戦闘力が低かったために、ドドリアに勝てなかった。
でも…一度死にかけて完全に回復してるから戦闘力は急増している
はずだぜ！

《……どうする？》

スカウターが俺に訊く。

答えは…ひとつだ！

「
∴ 貴様らをぶっ潰してやる!!」
」

逆襲！サイヤ人魂

この時バーダックは気づいていなかった。

自分の戦闘力が凄まじく上昇していることに…

「うらああああ！！」

地面を蹴ったバーダックは、まっすぐドドリアに向かっていく。

「ぬお！？」

バーダックの動きを見たドドリアは驚きを隠せないでいた。

「こ…こいつ！速え…！」

戦闘力が上がったということは、つまりスピードも上がったということである。

バキッ！！

バーダックはドドリアの顔面に拳を叩き込む。

「…ぐッ！ぐうう…！」

激痛で顔をおさえるドドリア。

だが、それがバーダックに攻撃させるチャンスを与えてしまった。

「くたばれえええ!!」

そのままバーダックはエネルギー波を放ち、ドドリアを消し去った。

「う…うわああ!!」

「に、逃げろ!!」

ドドリアを倒された雑兵達は慌てふためき、逃走しようとする。

「逃がすかぁッ!!」

雑兵達を睨みつけたバーダックはライオットジャベリンを放ち、彼らを一気に葬り去った。

「はぁ……お前ら大丈夫か!？」

敵を一掃したバーダックは負傷している彼女達の方を向く。

「さすが…バーダックさんです…」

皆が気絶している中、エリオだけは意識を取り戻していた。

「一体なんでこんなことに…!？」

「実は…」

*

エリオによると、バーダック達が出かけた後、ドドリア達が来たらしい。

そしてなんとロストログア、ジュエルシードを要求してきたのだ。

「渡さねえところだぞ…!」

エリオを殴り飛ばすドドリア。

それから戦闘になったということだった。

*

「そうか…遅くなって悪かったな」

そうバーダックが言った時だった。

「フッフッフ…」

突如、不気味な笑い声がバーダックとエリオの耳に届く。

「「！？」」

声のした方を向くバーダックとエリオ。

「……ザーボンか」

「ドドリアの反応が消えたので確認にいつてみたら、まさか下級戦士のサイヤ人に倒されていたとはな」

そこにはもう一人のフリーザの側近、ザーボンが立っていた。

「そうやって馬鹿にしてろ。少なくともあの時の俺とは違っぜ！」

バーダックにそう言われ、ザーボンは自分のスカウターのボタンを押す。

ポチッ！ピピピピピ…！

「な…なんだと…！？15000…23000……！？」

パンッ！！

「ぐわッ！？」

そこまで測った時、ザーボンのスカウターが爆発した。

「そうか…流石に私も本気を出さねばならんようだな」

ボンッ！！

「なッ…!？」

その時、ザーボンの全身の筋肉が盛り上がる。

そして…先程とは比べものにならないほど醜い姿に、ザーボンは変身した。

「…それがお前の真の姿か」

「そうだ。私はこの醜い姿の自分が嫌でな、常に封印してきたのだ」
それがザーボンのコンプレックスだった。

「なるほど…確かに気持ちわりい見た目だぜ」

ザーボンにそう言い放ち、ニヤリと笑うバーダック。

「…!!…許さん…許さんぞ…!!」

バーダックの一言に激怒したザーボンは、彼に襲い掛かった。

「ふん、てめえも八つ裂きにしてやるぜ!」

ザーボンの変身後の戦闘力は約30000。

そんなザーボンも、パワーアップしたバーダックの敵ではなかった。

「くらえ猿野郎が!!」

ザーボンは拳を振り上げ、バーダックに襲い掛かる。

「黙れイボガエルがあッ!!」

攻撃をすんなりかわし、ザーボンの腹に拳を叩き込むバーダック。

「ぐおッ!!」

ザーボンは腹部をおさえ、倒れ込む。

「殺す前に訊いておく。何故貴様らがここに…?」

そんなザーボンの胸倉を掴み、睨みつけるバーダック。

「ぐッ…仕方あるまい」

ザーボンは敗北を悟ったのか元の姿に戻り、語り始めた。

「惑星ベジータを消し去った後、我々はフリーザ様の故郷“惑星フリーザ”に帰還することにした。その途中で妙な光に包まれてしまった。気づいたら、我々の宇宙船は山の奥に着陸していた。そして数ヶ月にわたり、この星を調べ上げた。するとここには、主の願いを叶えるジユエルシードという物があると知ってな。フリーザ様

はそれで“永遠の命”を叶えようとお考えになった…という訳だ」

「そんな……ということはフリーザもミッドチルダに……！」

「そういうことだ。私はフリーザ様に命令されただけで…見逃してくれ！た、頼む！」

この期に及んで命乞いするザーボンに対し、バーダックの中から怒りが湧き上がってきた。

「これまで散々こき使ってきたやつに…勝手な事ぬかすんじゃないえ……！」

ズシュッ……！

怒ったバーダックは拳にエネルギーを溜め、ザーボンの腹を貫いた。

「ぐほッ…げほ…おおお……」

傷口をおさえ、ザーボンはうつ伏せに倒れ込む。

「トーマ達やエリオ達の痛み…思い知れええ……！」

ドガッ……！

バーダックはザーボンの腹を蹴り上げ、海へと吹き飛ばした。

*

そして数十分後、なのは達三人が戻ってきた。

今回の襲撃でほとんどの局員は負傷し、ティアナ以外はデバイスを破壊されていた。

とりあえずはやては皆を病室に移し、難を逃れたなのはとフェイト、そして自分を含めた三人で会議を始めた。

「今回、私ら機動六課はかなりの痛手を負ってしもうた。幸い死者は出なかったけど、バーダックさんの言うフリーザっていうのがいつ来るんかということもわからへん…」

「そうだね…ヴィヴィオはザフィーラが守ってくれたおかげで無傷だし」

「これからどうしよう…」

三人は頭を抱えた。

参上！ギニュー特戦隊

その頃、宇宙船のフリーザは…

「ザーボンさんもドドリアさんも帰ってこないところを見ると……どうやら殺されたようですね。あらかじめギニュー特戦隊を連れてきておいてよかったですね…… ホッホッホ！」

フリーザは空を見上げ、ほくそ笑んだ。

*

夕方、バーダックはスバル達の病室に来ていた。

「すみません、バーダックさん……」

スバルを始め、皆が落ち込んでいる。

「気にすんな。あれはお前達の手に負えるような相手じゃねえ」

「…あの人達が、バーダックさんの世界にいた…」

恐る恐る尋ねるギンガ。

「ああ。フリーザの側近、ザーボンとドドリアだ」

「でもバーダックさん、たった一人でその二人を倒したじゃないですか！」

唯一、現場で意識を取り戻したエリオが言う。

「…そういや、なんかあいつら弱かったな。おいギンガ」

「はい？」

バーダックはギンガに声をかけ、スカウターを渡す。

「俺の戦闘力を測ってみてくれ」

「…はい！」

ピピピピピ…！

スカウターを装着したギンガはバーダックの戦闘力を測定する。

「えっと…120000！120000ですよ！」

「なにッ！？お…俺はそんなにパワーアップしてたのか…！」

静かに感激するバーダックだが、ギンガ達には数値の意味が理解で

きない。

「…バーダックさん？その数値は一体…」

皆が「わからない…」といった表情をしている。

「…例えば、サイヤ人でも魔導師でもない人間…市民が銃で武装していたとする。そしたらそいつの戦闘力は5だ」

「少なっ！」

バーダックの説明にスバルが驚く。

「それでバーダックさんの戦闘力が120000って……凄いじゃないですか！」

「でも…イマイチよくわからないな」

エリオが首を傾げる。

「そうだな…小さな惑星なら潰せると思うが」

これを聞き、皆は開いた口がふさがらなかった。

「それに、お前達のデバイスまでドドリアに壊されちまって……」

「あ、それなら大丈夫です。シャーリーさんは無傷だったんで修理をお願いしました」

「そうか…」

そう呟き、先程から俯いて一言も喋らないティアナに近づくバードック。

「ティアナ。すまねえ……」

「……えっ？」

突然謝られ、戸惑うティアナ。

「お前達を守ってやるって言ったのに……本当にすまねえ！」

そう、バードックはティアナ達を守れなかったことに罪悪感を感じていた。

「な、何言ってるんですか！バードックさんは悪くありませんよ！」

「そうですよ！それに、あいつらをやっつけてくれたじゃないですか！」

「お前達……」

「バードックさんは私達機動六課の誇りなんですからね！」

ギンガがニコツと微笑む。

「お……おっ……じゃ、俺は仕事があるから行くぞ。じゃあな」

そう言い、バードックは病室を後にした。

*

翌日、フリーザの宇宙船ではギニュー特戦隊を含めた作戦会議が開かれていた。

「フリーザ様、今回の我々の任務をお教えください」

ギニューがフリーザに敬礼する。

「実はザーボンさんとドドリアさんの二人が何者かに殺されましてね」

「へん！だらしねえ奴らだぜ！」

「フリーザ様の側近だからって調子に乗ってたからじゃねえのか？」

ゲラゲラ笑うリクームとバータ。

「静かにせんか！」

その二人を一喝するギニュー。

「申し訳ありませんフリーザ様、続きをどうぞ」

「なので二人を殺した者を捜し出して、私の前に連れてきてください。ついでにジュエルシードという物も奪ってきてください」

「了解ですフリーザ様！では行つて参ります！」

そして五人は同時に動き出し、円陣に並んだ。

「ギニューー！！ファイトー！！」

そして全員が飛び立っていった。

*

ピピピピ！！

「……」

自室にて待機していたバーダックのスカウターが鳴り響く。

《大きな反応が五つ……来るぞ！》

「五つ……って五つだと！？」

五つという数字に驚き、バーダックは部屋の窓から飛び出した。

（せめて六課から離れねえと……！巻き添えくらわせちまつ……！）

そのままバーダックは森の中に入り込んだ。

*

ピピピピピ……！

《バーダック、気をつけろ……！！》

シュン！

「来た……！」

そう静かに呟くバーダックの前には、いつの間にか五つの人影があった。

「なんだ貴様らは…?」

その五人組を睨みつけるバーダック。

「リクーム!」

「バータ!」

「ジース!」

「グルド!」

「ギニユー!」

「「みんな揃って!ギニユー特戦隊!」!」

シャキンー!!

「……」

あまりの変人ぶりにバーダックは呆れていた。

「隊長、こいつサイヤ人ですよ!」

バーダックの尻尾を見てジースが声を上げる。

「なるほど、戦闘力は120000か。ザーボンやドドリアがかなわんはずだ」

バーダックを見てニヤリと笑うギニュー。

「…って俺達より強えじゃねえか!」

「そうだな。だからお前達四人でかかれ。それならフェアだろう?」

「さすが隊長!」

「よし!それで決まりだ!」

仲良く作戦を決めた特戦隊は、バーダックの方を向く。

「いくぜええ!!」

ジースの一言を合図とし、四人がバーダックに襲い掛かった。

参上！ギニュー特戦隊（後書き）

よう、俺はバーダックだ

なんか変な五人組と戦うハメになっちまったが、全員ぶちのめしてやる！

次回、ソリッドステート・Strikers 「バーダックvs特戦隊」

バーダック vs 特戦隊（前書き）

リクームとバータが活躍しません。ご了承ください。

バーダック vs 特戦隊

四人のパンチをかわしたバーダックは上空へ飛び上がる。

「らがああッ!!!」

だがバーダックの背後には、バータが待ち受けていた。

ガシッ!

バータは背後からバーダックを押さえ込む。

「イッヒヒヒヒ!うおりゃああ!!!」

ドスッ!

「ぶほッ!!!」

パワー自慢のリクームに腹を殴られ、バーダックの意識が飛びそうになる。

「もういっちょう!!」

再びリクームの拳が迫る。

(くッ…一か八かだ…!)

覚悟を決めたバーダックは、バータもろとも宙をくるっと前向きに回る。

「んお…!?!」

ドシャッ!!

「なにイ!?!」

「うおあああ!!」

なんとリクームの拳が、バータの背中に刺さっていた。

「ていッ!」

バータの拘束から逃れ、バーダックが体勢を立て直す。

「でやあああ!!」

そしてバーダックは動きがとれないリクームとバータに、エネルギー波を放った。

ドガアアアン!!

バーダックの策略に嵌った二人は一瞬にして消え去ってしまった。

「リクーム!バータ!」

「チクショー!ナメやがって!!」

拳を握り締め、憤るジース。

「仕方ねえ、こうなったら!!」

ジースが右手にエネルギーを集中させている。

「…ん…?」

バーダックもジースが何をするか探るため、じつと身構える。

「…クラッシャー!!」

叫ぶと同時に右手を広げたまま、ジースは腕を振り上げる。

「ッ…!？」

「ボール!!」

その時、ジースの手のひらにはエネルギーで出来た球が完成されていた。

シュバツ!!

そして、ジースはクラッシャーボールと呼ばれるエネルギー球をバーダックに向けて放った。

「く、来る…!」

だがすんでのところで、バーダックはクラッシャーボールを避けた。

「避けたって無駄だ!このクラッシャーボールには追尾効果がある

んだからな!!」

「なにッ!?!」

ジースの言葉通り、クラッシャーボールがバーダックの方へ戻ってきた。

「チッ…!めんどくせえ攻撃だぜ!」

悪態をつきながらバーダックはクラッシャーボールから逃げ回る。

「ハハハハハ!無駄だ無駄だ!そいつはお前に当たるまでいつまでも追い続けるぞ!!」

「…ちくしょう!なんて厄介な攻撃だ…!」

逃げ回るバーダックだが、ここで彼に異変が起きた。

「……!?!」

突如、バーダックの動きが止まる。

「か…身体が動かねえ…!?!」

ドシュン！！

「ぐああッ！！」

そして、動けないバーダックの背中にクラッシャーボールが直撃した。

「いいぞグルド！」

「でえっへへへへ！」

地上にいるグルドがバーダックとジースを見上げ、ニヤリと笑っている。

「な……てめえら……何しやがった！？」

バーダックがジースとグルドを睨みつける。

「今お前が動けないのは俺の超能力のせいだ！」

「くそっ……金縛りか……！」

バーダックが舌打ちする。

「そうだよ！オラオラオラぁッ！！」

そう叫びながら、ジースはバーダックにエネルギー弾を連続で撃ち込んだ。

ドドドドドドド！！

「ぐはぁぁぁッ！！」

あまりの激痛に吐血するバーダック。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

エネルギーを使いすぎたジースが息切れを起こす。

「おいジース！トドメは俺にささせてくれよ！」

グルドが上空のジースに呼びかける。

「チッ、仕方ねえな。その代わり後でチョコレートパフェ奢れよ！」

「オッケー！グヒヒ！はぁー！ッ！！」

超能力を使い、グルドは近くに生えていた木を引っこ抜き、先を鉛筆のように鋭く尖らせた。

「げへへへ！これでお前を串刺しにしてやるぞ！！」

（ま…まずい…！このままじゃ…やられちゃう…！）

焦ったバードックは、グルドの呪縛から逃れようと必死でもがくが、抜け出せない。

「無駄だぜ！グルドは戦闘力は低いが、超能力に関しては一流なんだよ！リクームとバータの仇…覚悟しやがれ！！」

「その通り！じゃ、そろそろ……死ねええ！！」

シュン！！

先の尖った木が、バーダックに高速で迫ってきた。

（もう駄目か…！？）

死を覚悟したバーダックだが…

フッ…！

「なッ…！？」

なんといきなり金縛りがとけ、身体が自由になったのだ。

「うおっと！」

そして迫ってくる木を回避した。

ズシャッ！！

その木は…バーダックの近くにいたジースの腹を貫いた。

「ぐはああッ！？」

そのまま、串刺しのままジースは地面に落下して動かなくなった。

「ふう…よくわかんねえが助かったぜ…」

事態を確認するため、グルドに目をやるバーダック。

「ッ…！？」

「ぐあああああ！！」

なんとグルドは四つある目の内、左上の目を押さえながら悲痛な叫び声をあげていた。

「や…奴に何が起きたんだ！？」

ピピピピ…！

その時、スカウターが鳴り響いた。

《バーダック、その茂みに小さな魔力を感じるが…気のせいかな？》

「魔力だと…？」

スカウターの言う茂みとは、グルドの左側の茂みのことだ。

目を凝らし、バーダックはその茂みを注意深く見る。

「なッ…！？」

そして、何かに気づいたバーダックは再び驚愕した。

「……ティアナー！」

なんとその茂みにはクロスミラージユを構えたティアナが潜んでおり、グルドの左上の目を狙撃したのだ。

グルドもティアナの存在に気づいたようだ。

「そりゃ…ねえぜ…」

そう呟いたグルドは、力無く地面に倒れ込んだ。

そしてバーダックは、グルドの近くに着地する。

「き…汚ねえぞ…」

グルドは残り三つの目でバーダックを睨みつけた。

「へっ！四人がかりでかかってきたてめえらの方がよっぽど汚ねえぜ！」

バーダックはそう吐き捨てた。

「こ…この俺が……低俗な猿野郎と卑怯な小娘にやられちまうとはな…頭にくるぜ…！」

「ほざけえー！ーッ！ー！」

バシユッ！！

怒ったバーダックはエネルギー弾をグルドの頭部にぶつけ、グルドの息の根を止めてすぐティアナの方を向く。

「ティアナ！何故ここに来た！？」

「……………！！」

ティアナの身体がびくつと震える。

「そ…その… たまたま、バーダックさんが…窓から飛び出していくのを見たんで…」

「お前はまだ怪我人だろ！さっさと帰っておとなしくしてろ！！」

口調の荒いバーダックに驚きつつも、ティアナは本部へと戻っていた。

その小さな背中中は、小刻みに震えていた。

バーダック vs 特戦隊（後書き）

よう、俺はバーダックだ！

ティアナにはああ言っちゃったが、あいつがいなかったら俺は死んでいただろうな…

だが戦いはまだ終わっちゃいねえ。まだ変な奴らの親玉が残っていやがる！

次回、ソリッドステート・Strikers 「隊長ギニョー」

隊長ギニュー

ティアナが去った後、バーダックはギニューの方へ向き直った。

「中々やるじゃないか。少しは楽しめそうだな」

「そうだな。俺も強い奴と戦えると思うと、ワクワクして仕方ねえんだ」

二人はニヤリと笑い、微動だにしない。

そんな二人の間を風がふき、バーダックの髪が靡く。

「ギニュー 特戦隊のオーツ!!」

「...!?!」

「俺が隊長！そおう！ギニュー様だッ！！」

そう叫び、歌舞伎のようなポーズをとるギニュー。

「な…お前何してんだ…？」

バーダックは啞然としている。

「んなッ…貴様あ！貴様にはこの素晴らしいスペシャルファイティングポーズが理解出来んのかぁッ！？」

*

「…なんか…おもしろい人だな…」

会議室にて、はやて達はモニターでバーダックの戦いを観戦していた。

「バーダックさん…大丈夫かな？」

「いざという時のためにシグナム達を待機させてあるから大丈夫だよ！」

「そうだね。シグナム達なら…」

＊

「隙あり！」

地面を蹴り、ギニューがバーダックに迫った。

バキッ！

「ぐあッ！」

バーダックの顔面にギニューの拳がクリーンヒットする。

その衝撃でスカウターが外れてしまった。

「し、しまった！スカウターが…！」

「何処を見ている！俺はここだぞ！」

ドスッ！

「うぉぁぁッ!!」

今度は腹部を殴られ、血を吐いてしまう。

「くそッ！先程のダメージのせいで…！」

だがバーダックも黙ってやられる男ではない。

「ふざけやがつてええ!!」

そう叫ぶやいなや、バーダックはギニユーの脚を払い、地面に転倒させた。

「なに!!？」

バーダックは右手にエネルギーを集中させる。

「でえりやぁぁぁぁ!!」

ドシュッ!!

必殺技のライオットジャベリンをバーダックは作り出し、ギニユーの腹に叩き込んだ。

「ぶぉッ…!!」

流石のギニユーも、至近距離から放たれた必殺技に耐えきれず、吐血する。

「くらいやがれ！この野郎！」

バーダックは倒れ込んでいるギニユーを踏みつけ、蹴飛ばした。

*

二人が戦っている中、この三人は草の茂みに隠れて待機していた。

「…なあシグナム、ザフィーラ」

「なんだ？」

「どうしたのだ？」

シグナムとザフィーラに声をかけたヴィータがボソツと呟いた。

「あたしら…必要ないか？」

*

バーダックはギニユーを痛めつけながらも、一つの疑問が浮かんでいた。

（…なんか変だな…こいつさっきから全然抵抗しねえ…）

そう、先程からギニューはサンドバッグ状態なのだ。

やがてバーダックは、ギニューを痛めつける足を止めた。

「お前…一体何考えてやがるんだ!？」

そう彼が問い掛けた時、ギニューはニヤリと笑った。

そして…

「チエーーーーンジ!!」

その時、ギニューとバーダックを紫色の光が包み込んだ。

「んなッ…身体が動かねえ…!?!？」

そして二人の間を二つの閃光がすれ違った時、紫色の光は消えた。

それと同時に、バーダックとギニューは動かなくなった。

「お…おい。何が起きたんだ!？」

「…わからん…!」

茂みに隠れているヴォルケンリッター達も啞然としている。

やがて二人が動き出すが、違和感があった。

「ど…どうして…俺がそこに…?」

ギニューの身体がバーダックの身体を指差し、驚いている。

「フフフフ…交換させてもらったのさ。貴様と俺の身体をな！！」

そう、ギニューが使ったのはボディチェンジだった。

隊長ギニュー（後書き）

よう、俺はバードックだ！

なんてこった…俺の身体があの変なヤローにとられちゃった…！

このままじゃ殺されるところか、主役交代なんてことも……させるか…！

次回、ソリッドステート・Strikers 「身体を取り戻せ！」

身体を取り戻せ！

「ハハハハハ！俺は素晴らしい身体を手に入れたぞ！」

バーダックの姿をしたギニューは高笑いをあげる。

「ち…ちくしょう…こんなことが…！」

一方、ギニューの姿をしたバーダックは傷口をおさえ、膝をついてしまう。

「よおし、とりあえず…消えろ…！」

そう叫び、ギニューがバーダックに手のひらを向けた時だった。

「させねーぜ…！」

茂みから三つの人影が飛び出す。

「ムッ！」

それを察知し、ギニューは飛び退く。

「お…お前ら…！」

バーダックが見たのは、グラーフアイゼンを携えたヴィータだ。

「私もいるぞ」

「随分と厄介な事になっているな…」

シグナムとザフィーラも後に続いた。

「貴様らは何者だ？」

三人を睨みつけ、静かに問いかけるギニュー。

「時空管理局・機動六課スターズ副隊長、ヴィータだ！」

「同じくライティング副隊長、シグナム」

「我はザフィーラだ」

「…時空管理局…そうか、貴様らがジュエルシードを持っているんだな？」

（ジュエルシードを知っている…本部を襲った奴らの仲間か！）

そう確信するヴィータ。

「だがジュエルシードは渡さん。その身体をバーダックに返しておとなしく帰れ」

シグナムがレヴァンティンをかまえる。

「そうはいかな。お前達を倒してでも、ここを通らせててもらおうぞ！」

そう叫んだギニューは、ザフィーラに襲い掛かった。

「来るか！」

ザフィーラはギニューの拳を受け止める。

「ラケーテン…ハンマー…！」

その隙に、ヴィータが回転しながらギニューに衝突する。

「ぐッ！ガキが…！」

バキッ！

「うわああッ…！」

ギニユーに腹を蹴られたヴィータはグラーファイゼンを取り落とし、腹部を押さえて倒れ込む。

「飛竜一閃!!」

「そりゃああ!!」

そしてシグナムが放った飛竜一閃も、ギニユーは蹴り一発ではじいてしまった。

「チツ…流石はバーダックの身体だな…」

シグナムが額に汗を浮かべる。

「確かに…だが我とて容赦はせん!」

そう言い放ったザフィーラは、ギニユーの腹に拳をねじ込んだ。

「ぶほおああッ!!」

そしてザフィーラはその場から飛び退き、ギニユーとの距離をとった。

「我とて毎日バーダックと修行しているのだ。今では戦闘力は20000近くはある。それに貴様は、バーダックの身体になれていないようだな」

「き…貴様ああッ!!」

ギニューがザフィーラを睨みつけ、飛びかかるとした時だった。

「させるか!!」

ガシッ!

「なっ…貴様何をするかあッ!？」

なんと、先程の自らの攻撃でボロボロのバードックが、後ろからギニューを取り押さえたのだ。

「俺の身体を…返しやがれええ!!」

そう叫んだバードックは、ギニューの脳天目掛けて拳を振り下ろした。

ドシャッ!!

「ぐぎゃあああッ!!」

バーダックの思わぬ不意打ちに、ギニューは倒れ込んだ。

そして起き上がって距離をとり、ザフィーラを睨みつけた。

「…!」

こちらを睨むギニューに対し、ザフィーラは身構える。

だが……

「チエーーーーンジ!!」

その時、ギニューとザフィーラの周りを紫色の光が包み込んだ。

「しめた…！」

バーダックは小さくガッツポーズをとり、ギニューとザフィーラの間に割って入った。

「な…！？ど、どけえー！ーッ…！」

焦ったギニューの音が響く。

ドシャアアアッ…！！

光と光が衝突し、ギニューとバーダックが動かなくなった。

やがて、バーダックとギニユーの身体がゆらりと動き出す。

「よ…よくも…邪魔を…！」

「へへへ…やったぜ！」

そう、二人は元の身体に戻ったのだ。

「…まさか…戻ったのか！？」

「へっ…おかげさま…でな……」

ドサッ！

ギニユーと入れ替わっている間、ヴィータ達の攻撃により全身傷だらけのバーダックは仰向けに倒れ込んだ。

「ってことは…あのヤローは今度はあっちか！」

同じく傷だらけのギニューは、ヴィータと対峙していた。

「こ…こうなったら…貴様でもよい！チェンジしてやる！！」

「な…なんだと！？」

「チエー…ンジ！！」

「これではさっきの繰り返しだぞ！」

「ど…どうする！？」

「シグナム！！ギニューを攻撃しろ！！もう時間がねえ！！」

倒れているバードックが、必死でシグナムに叫ぶ。

「承知した！」

シグナムはバーダックの方を向き、頷いた。

それと同時に剣のレヴァンティンが、弓に姿を変えた。

「シュツルムファルケン！！」

ズシュン！！

シグナムの必殺技、シュツルムファルケンがギニューに迫る。

そして…

ズシャッ！！

「ぐぎゃあああああ!!!!」

辺りに悲鳴が響き渡る。

ドサッ…!

そしてギニューはその場に倒れ込み、動かなくなった。

身体を取り戻せ！（後書き）

よう、俺はバードックだ！

変な親玉を倒したのはいいが、全身傷だらけでめっちゃくちゃ痛え…

ま、パワーアップには丁度いいか。なんせ、次の相手は…奴だからな…

次回、ソリッドステート・Strikers 「バードックの入院」

バーダックの入院

「…助かった…のか…？」

「そうだ。シグナムのおかげだ」

ザフィーラからそう聞き、ヴィータは地面にへたり込んだ。

「ヴィータ、腰を抜かしている場合ではないぞ。早くバーダックを運ばねば…！」

シグナムがバーダックに肩を貸す。

「…へへ…随分…痛めつけて…くれたな」

バーダックはニヤリと笑い、皮肉を言う。

「し、仕方ねえだろ！」

顔を背けるヴィータだが…

「…元に戻ってよかったぜ」

ボソツと、そう呟いた。

「…いてて…今…なんて…？」

「な、なんでもねえよ！」

顔を真っ赤にし、ヴィータは怒鳴った。

「とにかく、このままではまずいだろう」

そう言い、ザフィーラもバードックに肩を貸した。

「とりあえず、シャマルのところへ連れて行こう」

「そうだな」

シグナムとザフィーラがバードックに肩を貸し、それをヴィータが先導するという形で、四人は本部へ戻っていった。

*

シグナム達によって運ばれてきたバードックは、シャマルの医務室に到着した。

シャルもモニターで戦いの様子を見ていたので、激しい戦いだということを知っていた。

「うぐツ…！いてて…」

全身傷だらけのバーダックはベッドに寝かされる。

「回復魔法を使います。じっとしててくださいね」

「ああ…動けねえから…大丈夫だ…だからさっさと終わらせてくれ…！」

「そんな憎まれ口叩いてる場合じゃねーだろ！」

ヴィータがバーダックにそう言うが、シグナムが口をはさむ。

「いや、お前が言っても説得力がないぞ」

「う、うるせーな！」

「静かにしろ。ここは病室だぞ」

今のザフィーラの一言でヴィータは口を閉じた。

「…ふう、終わりましたよ」

治療が終了し、バーダックがベッドから起き上がった。

「…すまねえシャマル。…まだ頭がガンガンするぜ」

頭を少しかかえるバーダック。

その頭痛と一部の切り傷を除き、バーダックの身体は回復していた。

「でもバーダックさん。とりあえず、あと一日は訓練お休みしてくださいね」

「別にいいじゃねえか。大したことじゃねえよ」

「駄目です！私は早くバーダックさんに元気になってほしいんです！」

シャマルの熱意に根負けしたのか、バーダックはため息をついた。

「ああ…わかった。おとなしくしとくよ」

バーダックの返事を聞き、シャマルが微笑む。

「はい。では私達は仕事がありますんで、何かあったら呼んでくださいね」

そう言ったシャマルはヴィータ達を連れ、病室を後にした。

*

その頃、フリーザの宇宙船では…

「……おかしいですね」

「…は？」

フリーザの一言に首を傾げる雑兵。

「ギニュー特戦隊の反応が…ありません」

宇宙船にて、遂にフリーザはギニュー達の反応が消えていることに気づいた。

「ま…まさかギニュー特戦隊が…五人とも…！？」

さすがにフリーザも、ギニュー特戦隊が倒されるとは思っていないかったようだ。

「明日、皆で確かめに行きましょうか」

「はっ！」

*

ある日、俺は機動六課の基地の前に立っていた。

だが施設は燃え上がっている。

俺はなんとかしようとするが、身体がまったく動かない。

くそっ！なんで動けねんだ！！？

そうやって俺がもがいている間にも、施設は大爆発を起こした。

ちくしょう！！！！何もできねえとかふざけんじゃねえ！！！！

なのはも、フェイトも、はやても、シグナムも、ヴィータも、シャルも、ザフィーラも、リインも、スバルも、ティアナも、エリオも、キャロも、ギンガも、ヴィヴィオも……みんな……死んだ……？

シンデシマツタノカ……？

「うわああッ!!?」

深夜、病室で眠っていたバーダックはベッドから飛び起きた。

「ゆ…夢か…」

安堵のため息をもらす彼だが、すぐにその表情は険しくなっていた。

（いや、これは夢なんかじゃねえ…未来だ!これから先に起こる悪夢だ!）

かつて自分達が襲った惑星カナッサの住人、トオロが放った「未来

を予知できる拳」の効果だった。

惑星ベジータが崩壊するときもそうだった。

「……フリーザか……！」

そう呟くバーダック。

そうだ、あんなバカげたことする奴はあいつしか居ない。彼はそう確信していた…。

バーダックの入院（後書き）

よう、俺はバーダックだ！

「俺が優しすぎる」という意見をよくもらっが、その理由は最終回近くにわかるからそれまで待ってくれ。

次回、ソリッドステート・Strikers 「宇宙の帝王・フリーザ」

宇宙の帝王・フリーザ

明朝、

「皆さん、ギニュー特戦隊の反応が消えたところを中心に探してください」

「はっ！」

フリーザは雑兵達を連れ、森の中を探索していた。

ピピピピ…！

その時、雑兵の一人のスカウターが反応した。

「フリーザ様！あちらの方角に沢山の生命反応があります！」

雑兵の指さす先は、機動六課の基地の方角だった。

「わかりました。行ってみましょう」

そして、フリーザ達は機動六課の基地へと近づいていった。

*

ピピピピ…！

「！？」

六課本部にて、バーダックのスカウターが反応していた。

《バーダック、沢山の反応が接近してくるぞ…！》

「な…なにッ！？」

《その中の一人はとても強大な力を持っている…！》

この報告を聞き、バーダックは悟った。

「……フリーザだ…！」

そう呟いたバーダックはスカウターを装着し、部屋を飛び出す。

ちなみに怪我はもう治ったらしい。

向かった先は……模擬戦場だった。

（確か今日、隊長・副隊長が怪我が治ったフォワード達と模擬戦してたはず……なのは達が危ねえ！）

*

だが時すでに遅し、フリーザ達は模擬戦場に到着し、なのは達と対峙していた。

「お前らだな？ギニュー様達を倒したのは！」

「隠すためにならねえぞ！」

雑兵達がフェイトに殴りかかろうとした時だった。

「お止めなさい！」

ヒュルルル…

ドガアアアン！！

「ぐああー！！」

模擬戦場に雑兵の断末魔が響き渡った。

「な、なんですか今は！？」

さすがのフリーザも、いきなり爆死した部下に驚く。

「フ、フリーザ様！あれを…！」

雑兵が指をさす。

フリーザもその先に目を向ける。

「……!!!?!」

そしてなのは達も目を向けた。

「「バーダック（さん）!!!」」

そこには、手のひらから少し煙を出しているバーダックがいた。

「へへへ……久しぶりだなフリーザ……!」

ニヤリと笑うバーダックに対し、フリーザはうろたえている。

「ど……どうしてあの時のサイヤ人がここに!? 惑星ベジータと共に死んだはずでは……!」

「お……お前がバーダックさんの仲間を殺した奴だったのか!」

エリオがフリーザを指さす。

「どうして…どうして!？」

普段温厚なキャロも、フリーザを睨みつけている。

「サイヤ人が愚かすぎるからですよ。不愉快な連中だ!」

「てめえ…!」

拳を握り締め、バーダックはフリーザを睨みつける。

「く…皆さん!サイヤ人を消し去ってしまいなさい!」

「」「」「うおおお!」「」「」

雑兵達が一斉にバーダックに襲い掛かった。

「へっ、雑魚共が！返り討ちにしてやる！」

バーダックも地面を蹴り、雑兵達の大群に飛び込んでいった。

*

一分後、

「こいつら弱すぎるぜ」

バーダックの周りには、変わり果てた姿の雑兵達が倒れていた。

「…少しはやりますね」

そう言ったフリーザは、目につけているスカウターのボタンを押し

た。

ピピピピ…！

ボフン！

その時、フリーザのスカウターが爆発した。

「なるほど…ギニューさんを超える力を持っているようですね」

そう、特戦隊との戦いでバーダックの戦闘力は、サイヤ人の限界を超えていた。

「ホッホッホ！……私の恐ろしさを思い出させてやるぞ…！」

ガラッと態度が変わったフリーザは、バーダックに襲い掛かってきた。

「くっ…！」

バーダックは、殴りかかってきたフリーザの拳を受け止める。

「フリーザ…貴様だけは俺の手で…！」

膝を曲げ、フリーザの腹に蹴りをいれた。

「うおッ…！」

流石にフリーザも吐血する。

「だりやりやりやあああ…！」

ドガッ！バキッ！

圧倒的な戦闘力でフリーザを袋叩きにするバードックだが、彼は一つの疑問を感じていた。

（…おかしい。フリーザの奴、まだまだ力を隠しているように見えるぜ…）

そして攻撃をやめたバードックは後ろへ飛び退き、フリーザとの距離をとる。

「フリーザ！てめえ…まだ本気を出してねえな！？」

するとフリーザは肩を震わせ、笑い始めた。

「オーツホツホツホ！よく気づきましたね！」

「やっぱりな…！」

チツと舌打ちするバーダックとは対照的に、フリーザはニヤリと笑う。

「せっかくですんで、私の真の姿をお見せしましょう。あなた達に恐怖と絶望を与えるために…ね」

そう言ったフリーザは両手を握り締め、力を開放していく。

「はあああああ…！」

「す……凄い！」

そう言ったスバルの声に気づき、バーダックがなのは達を振り返る。

「お前らまだいたのか！さっさと向こうに行け！..」

「フッフ、そうはさせないよ」

その声が耳に届くと同時に、全員に戦慄が走る。

全員が振り返ったそこには..

「待たせたね。これが僕の真の姿だよ」

最終形態のフリーザが、こちらを睨みつけていた…。

宇宙の帝王・フリーザ（後書き）

よう、俺はバーダックだ！

あれがフリーザの正体か…見た目はガキみてえだが、多分とんでもねえ強さに違いねえ！

だが俺だって…以前よりはだいぶ強くなっただぜ！！

次回、ソリッドステート・Strikers 「激突！」

激突！

*

真の姿を露わにしたフリーザと対峙しているバーダックは冷や汗を浮かべる。

「そいつがてめえの真の姿か。随分ガキっぽくなっちまったな」

「フン、こうした方が動きやすいんだよ。でも見くびらない方がいい」

シュン！

その時、光が走った。

バァン！

「あつ!?!」

ティアナが声をあげる。

「スカウターが…!」

そう、フリーザは一瞬、超高速の光線を放ち、バーダックのスカウターを破壊したのだ。

「スカウター!!」

バーダックが呼びかけるが、スカウターからの返事はない…。

「どうした?スカウターがそんなに大事か?」

バーダックを嘲笑うフリーザ。

「俺の……俺の相棒をよくも!!」

「ふん、戦いしか興味のないサイヤ人にそんな情があるとはね」

フリーザは冷たく言い捨てる。

「ああ……俺は、この世界に來た時…腹いせにこいつらを殺してやるうとも思った。だが…こいつらは俺に優しくしてくれやがった…正直、嬉しかったんだ。それにそんなことしたら、お前と同類になっちまうからな!!」

そう叫んだバーダックは、フリーザに向かっていった。

*

それから10分が経過した。

「ぐ…がはッ…げはッ…!」

「もう終わりかい？少しは楽しませてくれよ」

現在、傷だらけでうつ伏せに倒れているバーダックをフリーザが踏みつけている状態だ。

しかもバーダックは大量に出血している。

「このフリーザ様に逆らうからこつなるんだ！わかったか猿野郎！」

フリーザはバーダックの胸倉を掴み、何度も何度も殴った。

「うぐぁッ…!!」

そして飽きたのか、バーダックをなのは達の方へ放り投げた。

ドサッ！

「バーダックさん！」

全員がバーダックに駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「しっかりしてください！」

「お前ともあるう者が…あいつはとんでもない奴だ…！」

「今更気づいても遅いよ。僕はサイヤ人のような下等生物が大嫌いなんだ！」

そう言ったフリーザが、ゆっくりこちらへ歩いてくる。

「させない！」

スバルを始め、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガがフリーザの前に立ちはだかった。

「バーダックさんをやらせない！」

「お……お前ら……」

その光景を目の当たりにしたバーダックは驚きの表情を浮かべる。

「そうです！僕達に色々な事を教えてくれた大切な人を……！」

「あなたなんかに……！」

「やらせません！」

「邪魔だ……！」

ドシュン……！

「「「うわあああ!!」「」」

怒ったフリーザにエネルギー弾をぶつけられ、五人は吹き飛んだ。

「スバル! ティアナ! エリオ! キャロ! ギンガ!」

全身ボロボロのバーダックが、五人に叫ぶ。

「よくもみんなを!」

続いてなのは、フェイト、ヴィータ、シグナムもバーダックとフリーザの間に立った。

「君達も死にたいのかな?」

「黙れこの野郎ツ!!!」

グラーファイゼンを振りかざし、ヴィータがフリーザに飛びかかった。

「ギガント…シュラーク!!」

ガシッ!

「な、なにッ!?!」

ギガントシュラークは、あっさりフリーザに受け止められてしまった。

「まったく…いちいち勘にさわるヤロー共だああッ!!!」

そう叫んだフリーザは、ヴィータをシグナムに投げつけ、再びエネルギー弾を放って四人を吹き飛ばした。

「無駄な努力が好きな奴らだ」

そしてバーダックの前で足を止める。

「さらばだサイヤ人！」

そう言い放ち、人差し指をバーダックに向けた時だった。

「やめてー！ー！！」

全員の耳に子どもの声が届く。

「…ヴィヴィオ！」

なんと目に涙を浮かべてたヴィヴィオが、倒れているバーダックに背を向けてフリーザと向き合っていた。

「おじさんを殺さないで！！」

「ヴィヴィオ！来るなあッ！！」

叫ぶバーダックだが、ヴィヴィオは超高速で移動したフリーザに捕まってしまった。

「い…痛いよおお!!」

髪を鷲掴みにされ、ヴィヴィオが泣き叫ぶ。

「…人質か!」

そう呟くシグナム。

それを聞いたフリーザがニヤリと笑った。

「人質…? ちょっと違うね」

そう言ったフリーザは、手のひらに溜めていたエネルギーを、ヴィオの背中に放った。

ドシューン!!

「……ッ!」

この時、バーダックを見た。

フリーザの攻撃を受け、血を吹き出しながら空を舞うヴィヴィオの痛々しい姿を…

「ハッハッハッハ! チビがノコノコ出てくるからだ!」

笑い捨てるフリーザだが…

「……！」

その時、ボロボロのバーダックが黙って立ち上がった。

「ゆ……許さん……！よくもヴィヴィオを……」

「……んなッ……！？」

「もう我慢なんねえええええええッ……！！！！」

ドシャアアアーン……！！

その時、バーダックを金色の光が包み込んだ。

「な……なんだ！？」

やがて光の中から現れたバーダックの姿を目の当たりにし、フリーザは驚愕した。

いや、フリーザだけではない。

「ああ……」

「……バーダックさん……？」

なのは達も、バーダックの変化に驚愕していた。

「バ……バーダックさんの髪の毛が……金色に……！！」

そう、ヴィヴィオや皆を攻撃されたことによりバーダックの怒りは限界を超えた。

それにより、バーダックは超サイヤ人に覚醒したのだ。

激突！（後書き）

よう、俺はバーダックだ！

これが…これが超サイヤ人啊…

フリーザ！！ぜってえにぶっ殺してやるからなァッ！！！！

次回、ソリッドステート・Strikers 「反撃！超サイヤ人
バーダック」

反撃！超サイヤ人バーダック

「な…なんだ！？サイヤ人は大猿にしか変身しないはず…これは何なのだ！？」

うろたえるフリーザに対し、バーダックはニヤリと笑って言い放つ。

「…こいつかあ…かつてトーマから聞いた“超サイヤ人”ってやつは…」

「す…超サイヤ人だって！？」

うろたえるフリーザだが、バーダックの怒りはおさまらない。

「俺は…俺はお前を殺すまで許さねえー！ッ！！」

そう叫んだバーダックはフリーザに殴りかかる。

バキッ！！

「ぐぎぎや あああー！！」

体勢を立て直そうとしたフリーザだが、殴り飛ばされた先には既にバーダックが先回りしていた。

「なッ…!？」

「これはヴィヴィオの恨み!！」

そう言い放ったバーダックはフリーザの背中に肘を叩き込んだ。

ドガッ!!

「うぐああッ!！」

苦しむフリーザだが、バーダックは容赦しない。

「これはなのは達の恨み!！」

ドスッ!!

「うぎゃああ!！」

「そして…これが……!!」

拳にエネルギーを溜めるバーダック。

「お前に殺された全てのサイヤ人の恨みだぁぁッ!!」

ズシャアッ!!

怒りの戦士バーダックの拳は、フリーザの腹を貫いていた。

「ぶほッ…猿があーッ!!」

激昂したフリーザはデスビームを放った。

ズシュン!!

「ぐッ!?!」

「「「！！！！」」」

その光景を見ていたなのは達は驚愕する。

なんとデスビームは、バードックの心臓を貫いていたのだ。

「ハッハッハッハ！猿め！調子に乗るからだ！！」

高笑いをあげるフリーザだが、彼も瀕死の重傷だ。

「…てめえを…」

だがバードックは心臓を貫かれ、大量に血を流しながらも立っていた。

「そんな…！心臓を貫いたのに…！」

フリーザが驚くのも無理はない。

今のバーダックの目にはフリーザしか見えていないのだ。

「…てめえを殺すまで俺は絶対に死なねええ！…！」

瀕死のバーダックはライオットジャベリンを作り出し、上空へ放り投げた。

「スバル……お前の技…借りるぜ…！」

「私の…技…？」

キョトンとするスバル。

やがてライオットジャベリンが落下してきた。

「…はああああ…！」

右の拳にエネルギーを集中させるバーダック。

そして、バーダックの目の前までライオットジャベリンが迫ってきた時だった。

「デイベイイイイン………！」

「まさか………！？」

「バスター………ッ………！！！」

そう、それはスバルのディバインバスターを、バーダックが自己流にアレンジした技だった。

バシユウウツッ!!

バーダックの渾身の拳を受けたライオットジャベリンは、高速でフリーザに迫っていく。

「そんな…このフリーザがサイヤ人の猿ごときにイイイイ!!!!」

ドガアアアン!!!

バーダックのディバインバスターを受け、フリーザは完全に消え去った。

*

フリーザが完全に消滅したことを確認したバーダックは、仰向けに倒れ込んだ。

「バーダックさん！」

皆がバーダックに駆け寄る。

やがて、はやてを始めとする、本部に残っていた全員がバーダックに駆け寄ってきた。

「バーダックさん！バーダックさん！」

スバルは膝にバーダックの頭を乗せ、必死に呼び掛けている。

「…ぐ………ヴィ…ヴィヴィオは…？」

バーダックは自分よりもヴィヴィオの心配をしている。

「今シャマル先生が治療しています！大丈夫だそうです！」

涙目のエリオが言う。

「そうか…そいつは…よかったぜ…」

ヴィヴィオの無事を確認し、バーダックは微笑する。

「…へ…へへ…これで…すべてが変わった…！…この…ミッドチルダの運命……この…俺の運命…」

「バーダックさん…」

「…機動六課の…運命…」

血を吐きながら、必死で声を絞り出している。

「…そして…フリーザの…運命……も………」

そう言い終わったバーダックの腕が、だらりと地面につく。

「はっ…バーダックさん!!」

スバルは涙を流し、バーダックの名を呼ぶ。

「い…嫌ああー!!」

事態を察知し、泣き叫ぶティアナ。

「そ…そんなあ…」

「バーダックさんが……！」

六課の局員全員が涙を流していた。

こうして誇り高き超サイヤ人・バーダックはこの世を去った。

だが彼の顔は、満足げな表情で笑っていたという……

反撃！超サイヤ人バーダック（後書き）

次回は最終回です。

エピソード（前書き）

ヴィヴィオ視点

エピソード

「…………え…………？」

おじさんがいなくなつて数年が経つた。

あれから目が覚めた後…なのはママに、バーダックのおじさんが死んだことを聞いた。

…とっても悲しかった。

もう…頭を撫でてもらえない…

もう…抱っこしてもらえない…

もう…「おじさん」って呼ぶこともできない…

そう思うと…とっても悲しかった。

次の日、私はなのはママに連れられ、街中を歩いて横断歩道の近くで止まった。

そしてしばらく待っていると、黒い車が目の前で止まった。

これはフェイトママの車…

私となのはママは、フェイトママの車に乗り込んだ。

*

移動すること数十分、車はとある場所についた。

そう、ここはミッドチルダ内の霊園…バーダックのおじさんが眠る場所…

なのはママがお墓を磨き、フェイトママがお花を供える。

そして目を閉じて…両手をあわせた。

「バーダックさん…ヴィヴィオはもう小学生だよ」

なのはママが、おじさんのお墓に語りかける。

「そうですね…ヴィヴィオを見守っていてください」

フェイトママも微笑む。

「…おじさん…ありがとう…」

…お礼を言えた。

なんだか嬉しい。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

なのはママが手を取り、言う。

「…うん」

そう答え、三人でフェイトママの車に戻っていく。

帰り際、もう一度おじさんのお墓を振り返る。

以前なのはママから、おじさんは私を娘のように可愛がってくれていたことを聞いたのを思い出したからだ。

なら…おじさんはパパ？

「ほらヴィヴィオ、乗って」

フェイトママに促され、私は考え事を中断して車に乗る。

やがてエンジンがかかり、車が霊園から遠ざかる。

バイバイ…また来るからね…

……パパ！

——完——

エピローグ（後書き）

これで完結です。

今までありがとうございました！

次は半ば放置していたベジータの小説を更新していきますので、よかったら見てやってください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2352n/>

ソリッドステート・Strikers

2011年6月30日22時06分発行